（雛型）博士学位論文審査の要旨

【学位論文審査の要旨】

1. 本論文の課題

本論文では，体験を語るという行為から，体験学習における学びをとらえるための新たな分析枠組みを提示し，その有効性を検討する。この分析枠組は，認知発達への社会文化的アプローチに，相互行為分析の視点を導入したものである。この枠組みによって，体験学習の参加者が体験を語りあう過程を分析し，体験学習のプロセスを明らかにすることが可能になる。このことを，理論的な検討と経験的な研究の成果から具体的に示す。

体験学習についての概念的整理とこれまでの体験学習研究のアプローチを概観し，それらの問題点を補完するものとして社会文化的アプローチを提唱する。さらに，この社会文化的アプローチによる検討を有益なものにするために，相互行為分析の視点が必要となることを論じる。小笠原エコツアーと乳幼児子育て体験ワークショップという 2 種類の体験学習について調査を実施し，社会文化的アプローチの立場から，体験学習のプロセスを語りの相互行為による意味づけのプロセスとして検討し，その特徴を明らかにする。

最後に，社会文化的アプローチに相互行為分析の視点をとりいれた新たな分析枠組みの有効性について考察するとともに，体験学習研究における体験学習のプロセスや学習のとらえ方について再度検討する。

2. 論文の構成

第 1 部 体験学習のプロセスをとらえるための方法論
- 第 1 章 体験学習の概要
  - 1. 体験学習の定義と分類
  - 2. 本論文で扱う体験学習の種類と学習の特徴
    - 2-1. 小笠原エコツアー
    - 2-2. 乳幼児ふれあい体験ワークショップ
    - 2-3. 本論文で扱う体験学習の特徴
  - 3. 体験と経験
- 第 2 章 体験学習における学びをとらえる視点
  - 1. 体験－効果アプローチ
  - 2. 構成主義アプローチ
  - 3. 社会文化的アプローチ
  - 4. 相互行為の分析視点
- 第 3 章 本論文の目的と各研究の構成および分析視点
  - 1. 本論文の目的
  - 2. 各研究の構成と分析の視点

第 2 部 体験学習における体験の意味づけのプロセスの検討
- 第 4 章 エコツアー体験の語りにみる環境の学び（ 研究 1）
  - 1. 目的
    - 1-1. エコツアーにおける持続可能性のための学び
    - 1-2. 持続可能性のための学びを探るアプローチ
    - 1-3. 社会文化的アプローチとインタビューにおける語り

2. 方法
2-1. 調査概要
2-2. 分析手続き
3. 結果と考察
3-1. 語りにみる環境の学びの側面
3-2. 語りにおいて参照されるエコツアーの活動
3-3. 持続可能性とエコツアーに関する意味づけの特徴
4. 総合考察
第 5 章 インタビューにおける語りの関係性（研究 2）
1. 目的
2. 方法
3. 結果と考察
3-1. インタビューにおける語りの関係性
3-2. 2 つの語りの関係性と共成員性の可視化
3-3. 2 つの関係性のあいだ「体験を語り=聞く」
3-4. インタビューの語りの関係性と「対する関係」「並ぶ関係」
4. 総合考察
第 6 章 異なる語りの場における語りの関係性と環境の学びとの関連（研究 3）
1. 目的
2. 方法
2-1. 分析 1 の手続き
2-2. 分析 2 の手続き
3. 結果と考察
3-1. インタビューにおける語りの関係性と学びの語りとの関連
3-2. インタビュー以外の場における語りの関係性と環境の学びの語りとの関連
4. 総合考察
第 7 章 体験学習のふりかえりにおける語りの関係性と学び（研究 4）
1. 目的
2. 方法
2-1. ふれあい体験 WS の概要
2-2. 調査手続きと分析手続き
3. 結果と考察
3-1. ふり返り場面における「質問者-回答者」の関係性
3-2. ふりかえり場面における「体験者どうし」および「体験を語り=聞く」の関係性
3-3. 語りのテーマによる意味づけの難しさ
3-4. 経験内容に関する解説と語りの関係性
3-5. ふれあい体験 WS における学び（ ワークシートの分析）
4. 総合考察
第 3 部 語りの相互行為にみる「体験」の学び
第 8 章 体験学習への社会文化的アプローチの有効性と意義
1. 本論文の研究結果の含意
1-1. 各研究の目的と結果
1-2. 研究結果の含意
2. 本論文の分析枠組みの有効性
2-1. 体験学習の整理と社会文化的アプローチによる分析の補強
2-2. 体験学習における「学び」の再検討
2-3. 他のアプローチと異なる実践的な貢献
3. 本研究の課題と展望

3. 論文の要旨

第 1 部　体験学習のプロセスをとらえるための方法論

第 1 章では，体験学習についての概念的整理を行った上で，実践への参加形態の視点から 3 つの分類基準（学習の場と実践の現場との関係，学習者の将来の実践参加の可能性，目標とされる知識・スキルの具体性・専門性）を設定した。そして，この分類基準に基づき，第 2 部で取り上げる 2 種類の体験学習を位置づけた.

第 2 章では，体験学習における学びをとらえるアプローチについて論じた。これまでの体験学習研究のアプローチである体験－効果アプローチ，構成主義アプローチを概観し，それらの問題点として，体験学習の参加者が活動のなかで他者と相互作用しながら学びを進めているという，学習のプロセス自体を記述し，実践的示唆を得ることが難しいことを指摘し，それらの問題点を補完するものとして社会文化的アプローチを提唱した。本研究では体験を意味づける行為である「語り」に注目し，体験学習の参加者が，自分が参加した学習活動の体験をその場で，あるいは事後的に，ことばによって意味づける「語り」を検討することで学習プロセスを検討することができる可能性を論じた．さらに，これまでの社会文化的アプローチの諸研究において，相互行為の「いまーここ」の状況において他の発話と連鎖を形成することによってはじめて意味を獲得するという視点が，データの分析において活かされていない点を論じ，社会学におけるエスノメソドロジーから発展した会話分析や相互行為分析といった手法を取り入れる必要があることを指摘した.

第 3 章では，これまでの議論を受けて，本論文の目的と分析視点を整理した.

第 2 部　体験学習における体験の意味づけのプロセスの検討

第 4 章では，エコツアーにおける各ツアー参加者の持続可能性のための学びのプロセスの特徴を明らかにするため，社会文化的アプローチに基づいて，持続可能性のための学びの語りがどのツアー活動の語りとともに示されるのか，またそこではどのような意味づけが行われているかについて検討した。その結果，1)エコツアーにおける持続可能性のための学びのきっかけとなるツアー経験の内容は一様ではなく，参加者はさまざまな活動を通じて学びの側面についての気づきを触発されていること，2)自分自身の生活環境を含む地域環境の持続可能性とその保護に関する語りは，現地での交流を通じて見通すことが可能になったエコツアーの活動に従事する人びとの小笠原の地域環境に対する認識や保護に取り組む姿勢を媒介としてなされることが，明らかとなった。このことから，持続可能性のための学びを文化的道具に媒介された行為としての学習としてとらえたとき，「学びが深まる」とは，他者の発話を媒介として独自のツアー体験を意味づける専有を通じて，持続可能性のための学びに関連する体験の意味づけを有機的に関連づけていくことになることが示された。

第 5 章では，インタビューの相互行為そのものに焦点をあて，エコツアーの同行調査者がエコツアー参加者からツアー体験について尋ねるというインタビューの相互行為の特徴

を検討した。エコツアーの参加観察のインタビューにおいて，調査者とツアー参加者が達成する語りの関係性と語りの様式の特徴を相互行為の分析視点から記述した。その結果，参加観察のインタビューにおいては，調査者とツアー参加者とが共同で，「質問者－回答者」「ツアー体験者どうし」という 2 つの関係性を達成し，また，2 つの語りの関係性の中間に，「体験を語り=聞く」関係性を達成していること，そして，これらの関係性は，共成員性が可視化されるとともに移行することが示された。そして，「体験者どうし」の関係性においては，調査者と各ツアー参加者が，共通のツアー活動について「何を」「どのように」気づき，感じたのかを報告しあうことを通じて，多様な意味づけが生成されうることを指摘した。

第 6 章では，第 4，5 章での考察を受け，ツアー体験のインタビューにおいて展開していく調査者とツアー参加者との語りの関係性と各ツアー参加者の語りを検討した．まず，どのような語りの関係性が維持されているときに，どのようなツアー体験の語りが生じるのかを分析した（分析 1）．さらに，インタビューにおける語りの関係性とツアー体験の語りとの関係の特徴を，インタビューとは異なる語りの相互行為の場におけるツアー参加者のツアー体験の語りと比較することで検討した（分析 2）。分析 1 の結果，インタビューにおいては，語りの関係性が「質問者－回答者」に偏りがちであり，持続可能性のための学びの進展を示す「持続」の語りは，ツアー参加者が自ら回答を拡張したり，追加の回答を行ったりする場合にみられることが示唆された。また，分析 2 の結果，ツアー参加者どうしの体験の意味づけは，主に「体験者どうし」を形成し，発話の補完など伴いながら他者とともに意味づけを行い，それを自分の語りにも引用することが示された。インタビューと異なり，日誌の意味づけでは，体験を共有していない他者に向かってより「深い体験」の意味づけが行われる可能性が示された。このように，語りの場（インタビュー，日誌，ツアーの各活動）によって，語りの関係性や語りのあり方は異なっていた。

インタビューという語りの場それ自体も，特定の語りの関係性を喚起し，語りに制約を与えることが明らかとなり，インタビューの回答における語りのみから環境の学びを評価するだけでは十分とはいえはないことが明らかとなった．このことから，環境学習の進展を図るためには，体験学習全般において行われている「ふりかえり」の場を設けることが，体験をともにしたツアー活動について他の参加者と語りあうことになるため，「体験者どうし」の関係性が達成されやすく，環境学習の各側面に関する体験の意味づけを促進することを指摘した。

第 7 章では，エコツアーとは異なるが類似した形態の体験学習として「乳幼児ふれあい体験ワークショップ」をとりあげ，6 章で重要性を指摘した振り返りの場を設けて，語りの相互行為の分析視点を備えた社会文化的アプローチを用いて，語りの関係性とふれあい体験の意味づけの特徴を明らかにすることを目指した。結果として，ふれあい体験の意味づけのあり方は，ふり返りの場の設定と語りの関係性に応じて変化することが見出された。進行役は「体験者どうし」の関係性を志向するファシリテーターの役割を果たすことも可

能であることが見いだされた。さらに，体験学習のプログラムの異なる活動をサブグループに分けて実施し，後に入れ替えて実施するというプログラムの構成は，参加者による協同の語りあいを促進する 1 つの仕掛けとなっていた。具体的な知識やスキルについて，ふりかえりの進行役が解説を引き受ける場合，進行役は「教示者」といった役割を担うことになり，「体験者どうし」の関係性を維持することは難しくなるという問題点も見いだされた．その解決には，進行役ではない実践者が同席をして説明を行い，その説明が他の出来事と結びつけられたときに，参加者の学習が促進することが見いだされた．これらの点から，ふりかえり場面の語りの相互行為に注目することで，豊かな体験の意味づけが可能となるプログラム構成やふりかえりの手法についての示唆を得ることができた。

第 3 部　語りの相互行為にみる「体験」の学び

第 8 章では，これまでの研究を受けて，体験学習への社会文化的アプローチの有効性と意義について検討を行った．

体験学習における学びを体験の意味づけのプロセスとしてとらえることが可能であることが示された。体験の意味づけは，当該の相互行為の制約のもとで，他者との相互行為を通じて，他者の声を媒介としながら実現している。このように，実践の場に参加し，他者の声を媒介として体験を意味づけるプロセスを検討することは，学習のプロセスを実践の共同体への参加のプロセスとしてとらえる正統的周辺参加論とも共通するものである。体験学習は，特定の実践の現場に参加することがやはり重要なのであり，そうした実践の場と離れて特定の言説だけにふれる形態の学習（ビデオ視聴による学習等）では得られない機会が含まれている。また，本研究では，他者との相互行為による体験の意味づけという体験学習のプロセスの特徴についての知見のみならず，2 種類の体験学習のプログラムを改善するための含意も得られた。

本論文で提示した相互行為分析の視点に基づいた社会文化的アプローチの分析枠組みは，従来のアプローチとは異なり，ふり返りの場を含む体験学習プログラムのデザインを改善するアクションリサーチを可能にする。そして，体験学習のプロセスを詳細に明らかにするとともに，同じ学習環境でも個人によって異なる学びのプロセスを視野に入れながら，体験学習の提供者（現場の指導者や体験学習の運営者）の関わりの指針を得ることができる。本論文の貢献は，このような分析枠組みの提示とその有効性を示したことにあると考える。

最後に，本論文の限界点や積み残された問題を指摘し，今後必要とされる研究について展望した。

【審査結果】

本論文は，体験学習における学びを捉えるために，これまでのアプローチを整理した上で，それらを補完する，認知発達への社会文化的アプローチに相互行為分析の視点を導入

した新たなアプローチを提示し，小笠原エコツアーと乳幼児子育て体験ワークショップという 2 種類の体験学習に対してこのアプローチを適用し，体験学習のプロセスを語りの相互行為による意味づけのプロセスとしてデータを分析した論文である．本論文の成果は以下のように要約できる．

① 社会文化的アプローチに相互行為分析の視点を導入したアプローチによって，先行研究では捉えづらかった体験学習の学びのプロセスの一側面を明らかにできることを示した．
② インタビューや振り返りという語りの場を，相互行為分析を用いて綿密に分析し，どのように相互行為の場を作るかによって学習の促進の程度が異なることを示した．
③ エコツアーや子育てワークショップにおいて参加者の学習を促進するために，相互行為の場をどのように作るのかについて改善指針を提示することができた．
④ 社会文化的アプローチを取ることにより，体験学習において共通の経験をしながらも多様な変化を示す各人の学びのあり方があること，実践の現場では想定していなかった新たな方向への学びのあり方があることを明らかにした．

以上のような成果をもたらした論文ではあるが，公開審査においては，いくつかの問題点と課題点が指摘された．

① 社会文化的アプローチはこれまでの体験学習の研究方法を補完するものと位置づけられることから，量的な方法論である体験-効果アプローチを含む複数のアプローチと同時に取ることが実践では必要であると考えられるが，実践場面で他のアプローチとどのように融合するかについての視点が不十分である．
② 看護実習や介護実習のような，学ぶべきものがある程度明確に規定されている体験学習や，臨床実践のような実践体験の中での学習が長期のスパンにわたる体験学習に対して，このアプローチをどのように取ることが可能なのか明確な形で議論をして欲しかった．
③ 体験学習における相互作用の中での活動の意味づけには，参加者のこれまでの経験や年齢や性別といった個人の属性が重要な意味を持つと考えられるが，第 2 部の分析においてこのよう点が十分に考慮されているとはいえないのでないか．
④ 第 2 部での分析では，体験学習後の語りを中心に分析をしているが，このアプローチは実践の場そのものの学習活動中の行動や意味づけに対しても適用可能ではないのか．この点に関しては部分的にしか分析が行われておらず，詳細な分析を進めてもらいたい．

このような未解決な問題や課題点があるものの，本論文は博士論文として十分な内容と

水準を持つものである．2022 年 3 月 24 日に行われた公開審査における質疑応答でも，著者である文野洋が優れた見識と旺盛な研究意欲を有し，指摘された問題点や課題点に関して本人自身が自覚し，今後研究を発展させていく意志と十分な能力を有していることを示すものであった．よって審査者一同は一致して文野洋に博士（心理学）の学位を授与することが適当であると判断した．